

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

大学院で学んだ経験から

著者	上田 直人
出版者	大学図書館問題研究会
雑誌名	大学の図書館
巻	30
号	11
ページ	193-195
発行年	2011-11-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/6695

大学院で学んだ経験から

上田直人

<大学院の選択・入学の動機>

私は 2006 年 4 月に筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士前期課程に入学し、2008 年 3 月無事修了することが出来ました。

大学院の選択については、職場の勤務時間を変更することは出来ないので、業務が終わってから授業に出席できることが最低条件でした。当時東京都内でフルタイム勤務の社会人が図書館情報学を学べる大学院としては、前年に図書館・情報学専攻修士課程情報資源管理分野を開設した慶應義塾大学がありましたが、筑波大学でも大塚サテライトキャンパスで学べることに、そこで図書館経営管理コースという試みが新たに始まることを知り、図書館の経営について一度正式に学んでみたいと思ったことから後者の受験を選びました。また個人的なことですが、介護していた両親を相次いで看取ったこと、そのため日々の生活に（虚脱感とともに）少し時間が出来たこと、50 歳を目前にして（本来なら「天命を知る」歳ですが）何か新たなことを本格的に学ぶには最後のチャンスかなと考えたことなどが、気持ちを後押ししてくれました。

<研究テーマの選定>

それまで 20 年以上大学図書館職員として勤務し、図書館の奉仕対象としての学術研究の様子を長い間傍目から見て、それで一通りのことは分かったつもりになっていましたが、より実践的に理解するには、自分で研究のイロハを体験することも必要ではないかと感じていました。また、2000 年以降勤務先図書館が急速に業務委託を進める中で、専任職員がこれから一体何を目指すべきなのかを客観的に考えてみたいという気持ちもありました。それらのことから、「大学図書館が今目指すべき使命とは何なのか」ということを考察してみたいと考えましたが、それではあまりにも大きなテーマなので、その前段として大学図書館が自らの使命をどのように公表しているのかを、国内外の「ミッションステートメント」の調査として取り組むことにしました。

<大学院での学びの様子>

仕事が終わって勤務先から地下鉄で茗荷谷まで駆けつけると、大塚キャンパスの入り口前にはちょっとしたプレハブの休憩室がありました。授業開始まで少し余裕があるとき（時には授業が始まっても？）ここでパンやおにぎりや若干の腹ごしらえをしていました。脳へのエネルギーが切れると思考力が低下するという名目ですが、食べ過ぎると後で睡魔と闘うことになるので、その加減が難しいところでした。またここでは別の授業に出る人達と有意義な情報交換をすることもできました。

実際の授業で苦労したのは、老眼で資料が読み難いことと、久しぶりに筆記を取るノートでした。仕事はすべてワープロになっているので、悲しいことに自分の手で字を書く能力が衰えていることを痛感することとなりました。（ノートパソコンで器用に記録を取る人もいましたが、自分にはそちらの能力も足りなかったのです・・・）

授業終了後はお約束の懇親の場もありましたが、そこは翌日の仕事を考えて程々に？済ませたつもりです。

<大学院で学んで得られた成果>

大学院は本来高度で専門的な知識を学ぶために行くところなのでしょうが、私がまず感じたのは、「人に教わる・教える」ということはどういうことなのかを、改めて体験的に学ぶことができるということでした。歳を取ると人にものを教わる機会が減ってくるので、知らず知らず心の鎧が厚くなり、他人から素直に学ぶことが難しくなっているのを感じることはないでしょうか。私も最初はそのような状態でしたが、若い先生方や学友から様々なことを教えていただくうちに、思い切って自分が謙虚になることで初めて人からものを学べるのだと実感しました。

また近年大学図書館の現場でも、利用者教育など人にものを教える・伝える側面が重要となってきましたが、大学院という場所は、まさに生なプレゼンテーションの教材に溢れている現場ともいえます。修士論文をまとめる過程自体も、自分を教材にした実践的な情報リテラシー支援を学ぶ場であるといえるのではないのでしょうか。

もう一つ重要なのは、人とのつながりを形成することができることです。現在図書館職員間の横のつながりが消えつつある危機的状況だということが、様々に指摘されていますが（その意味でこの大図研の「場」は大変貴重なものだと思います）、大学院では職場の利害関係を超え、年齢も性別も超えて協力し合える新たな人間関係を作ることができます。さらに研究交流や発表の場に参加することで、一つの大学院の枠も超えて多くの社会人大学院生の方と知り合うことができます。私も修了後そのようなご縁で、別の大学院で学ばれた方と共著論文を雑誌に投稿する機会を得る貴重な経験を持ちました。

また修士論文作成に際して、訪問調査、アンケート調査などで多くの図書館のお世話になったことも良い経験となりました。最近、逆に自分達が調査を受ける側になることが何度もありますが、そのような場合にも自分の経験を踏まえて対応することができ、また現在研究を進めている皆さんには心からエールを送らせていただいています。

<修了して今思うこと>

昨年公開されて以来様々な議論を呼んでいる、科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会の「大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－（平成 22 年 12 月）」^{注1)}では、「大学図書館の現場における育成」の中で「研究者として大学図書館の新たなプロジェクトを開発するために調査研究等を行うライブラリアンは、大学図書館に所属しながらも研究を行う職員であり、大学院において研究者としての知識とスキルを学び、修士もしくは博士の学位を取得する必要がある」あり、またそのためには学部から大学院に進学するだけでなく、現職者が修士の学位を取得するパターンが考えられると記されました。

また新たな大学図書館職員のキャリアパスとして、例えば医学や法学分野など主題専門性を有する職員の複数大学間での異動や、図書館職員と教員が相互に乗り入れすること、

さらに専門的な知識を持つ外部人材の図書館職員としての採用や、反対に図書館職員が企業の情報専門家として転職することなどへの展望も示されました。これらのことがすぐに実現するのは難しいかもしれませんが、まずその一つのステップとして、今後ますます社会人大学院が機能していくことが重要なのではないかと思います。またもし大学図書館界にそのような流動性のある雇用環境が実現するなら、現在不十分な待遇に置かれている非正規・非専任職員の問題にも解決の糸口が出てくる可能性があると思います。やる気のある人には、業界を挙げて奨学金などを用意するシステムができないのでしょうか。

最後に私自身のことに戻りますが、修士論文で調査し考えたことをもとに、自分の勤務する図書館でも、曲りなりにもミッションステートメントを作成し、図書館将来計画の策定に関わることができました。大学院に行ったことは単なる研修としてだけでなく、その後の業務に自信を持って臨める自分を作り出すことができたという点で、大きな意義があったのではないかと考えています。

注1) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm

(うえだ・なおと／法政大学図書館)

naoto.ueda.75@adm.hosei.ac.jp